

シンポジウム4

輸血細胞治療2 「未来につなげる輸血医療を目指して～さまざまな視点から効率化を考える～」

血液製剤の使用に関する効率的業務

◎篠田 大輔¹⁾

社会医療法人 製鉄記念八幡病院¹⁾

私たちが日々行っている輸血は、医師や看護師にとっては年に数回、診療科や病棟によっては1年ぶりの輸血オーダーであることも珍しくない。そんな不慣れな臨床現場からの様々な問い合わせへの対応も輸血管理業務の一環であるが、そもそも投与速度や製剤の内容量、輸液との混注、針のG数、輸液ポンプの使用など、何の疑問も持たれず誤った知識のまま投与されているかもしれない。出庫後60分以内に使用するルールは本当に院内周知されているのか。輸血に携わる検査技師にとっては当たり前でも、現場の認識とは乖離が生じている事もある。机上の電子カルテで閲覧できる情報だけでは把握できない輸血療法の実態が、そこにある。検査技師が現場で輸血実施に関与する機会は少ないが、各施設の輸血担当技師は指針やガイドラインを把握しており、これを基に検査業務だけではない輸血療法の多岐に渡る院内規定について、中心となって定めていると思われる。この情報と知識を持って、検査技師が積極的に現場へ赴き、医師や看護師とコミュニケーションを図ることは安全な輸血療法に繋がる。製剤を出庫してから輸血されるまでの製剤の取り扱いや、システムでの認証操作を含む患者の確認方法、病棟毎のマイルールなど、それまで把握していなかった自施設の問題点にも気づく可能性が高い。現場との関わりにより単純な“効率化”を目指すのは難しいかもしれないが、当日はこのセクションにおける効率的業務について、私の考えを述べる。